

独立行政法人監査基準の改訂案について（公認会計士協会によって改訂を要する事項を整理したもの）（案）

独立行政法人監査基準（現行）	改訂案	改訂案の考え方（案）
<p><b>第 1 章 独立行政法人に対する会計監査人の監査（基本的な考え方）</b></p> <p><b>第 2 節 会計監査人の監査の位置付け</b></p> <p>独立行政法人は、「その行う事務及び事業が国民生活及び社会経済の安定等の公共上の見地から確実に実施されることが必要なものであることにかんがみ、適正かつ効率的にその業務を運営する」（通則法第 3 条第 1 項）責務を負っている。このような独立行政法人の公共的性格から、通則法第 3 9 条では、独立行政法人に対する会計監査人の監査は、財務諸表に加えて、事業報告書（会計に関する部分に限る。）及び決算報告書もその対象としている。これらの書類が監査の対象とされる理由は、以下のとおりである。</p> <p>まず、財務諸表に対する監査は、主務大臣の承認（通則法第 3 8 条第 1 項）を受けることを前提として、財務諸表が当該法人の財政状態、運営状況等財務運営に関する真実の情報を正しく表示しているかどうか、職業的専門家としての会計監査人のチェックを経ることを目的とするものである。財務諸表監査は、独立行政法人の会計監査制度の中核をなすものであり、会計監査人は、独立行政法人の財務諸表が、<b>独立行政法人会計基準及び同注解並びに一般に公正妥当と認められる会計基準に準拠している</b>かどうかを監査する。</p> <p>事業報告書は、独立行政法人が主務大臣に財務諸表を提出する際、その参考として添付される書類であり、業務運営の状況を報告することを目的とするものである。事業報告書は、財務諸表とは異なり、主務大臣の承認の対象ではなく、提出に際しても、通則法上、会計監査人の意見が付されることを要しない。事業報告書に対する監査は、財務諸表と密接に関連する会計に関する部分について、財務諸表と矛盾する記載がないかどうか、確認的に行われるものと解される。</p> <p>決算報告書も、財務諸表を提出する際に添付される書類であり、主務大臣の承認の対象ではない。決算報告書の監査は、決算報告書が予算の区分に従って決算の状況を正しく表示しているかどうかをチェックするためのものである。独立行政法人は、効率的な業務運営のために、中期目標、中期計画及び事後評価の仕組みが導入されており、事前計画との対比が重視されている。このため、決算報告書に関しては、予算の区分に従って決算の状況を正しく表示しているかどうかについて、会計監査人の意見が付けられるものと考えられる（通則法第 3 8 条第 1 項及び第 2 項参照）。</p>	<p><b>第 1 章 独立行政法人に対する会計監査人の監査（基本的な考え方）</b></p> <p><b>第 2 節 会計監査人の監査の位置付け</b></p> <p>（1 段落目：同左）</p> <p>まず、財務諸表に対する監査は、主務大臣の承認（通則法第 3 8 条第 1 項）を受けることを前提として、財務諸表が当該法人の財政状態、運営状況等財務運営に関する真実の情報を正しく表示しているかどうか、職業的専門家としての会計監査人のチェックを経ることを目的とするものである。財務諸表監査は、独立行政法人の会計監査制度の中核をなすものであり、会計監査人は、独立行政法人の財務諸表が、<b>一般に公正妥当と認められる独立行政法人の会計の基準に準拠している</b>かどうかを監査する。</p> <p>（3、4 段落目：同左）</p>	<p>○：改訂事項の考え方 ●：既出の改訂事項</p> <p>○【<b>準拠する基準の明瞭化</b>】</p> <p>・現行独法監査基準では、準拠する会計基準が、「独法会計基準」と「一般公正妥当な会計基準」の 2 通あるかのような規定ぶりとなっている。しかし、実際には独法の準拠する会計基準は、①各法人の主務省令で定める基準、②独法会計基準、③企業会計基準、が一体で適用されているというのが実態（各法人の主務省令で規定）であることを踏まえ、この際、この実態にあわせた規定ぶりに修正する。</p>

独立行政法人監査基準（現行）	改訂案	改訂案の考え方（案）
<p>以上のように、通則法第39条における会計監査人の監査は、<u>商法監査と類似した財務諸表及び事業報告書（会計に関する部分に限る。）に対する監査に加えて、独立行政法人の業務運営の方法を反映し、予算決算対比を目的とする決算報告書監査も求められている。</u>しかしながら、独立行政法人に対する会計監査は、あくまで財務諸表に対する監査が制度の中核であると考え。財務諸表は主務大臣の承認を要する書類であり、会計専門家による</p> <p>会計基準への準拠性の監査が強く要請されるからである。独立行政法人への会計監査については、企業会計における財務諸表監査の考え方を参考とすることにより、会計監査人の専門的な能力や実務面での蓄積を活用することが期待されるものと考え。</p>	<p>以上のように、通則法第39条における会計監査人の監査は、<u>会社法監査と類似した財務諸表に対する監査に加えて、事業報告書（会計に関する部分に限る。）に対する監査や、独立行政法人の業務運営の方法を反映し、予算決算対比を目的とする決算報告書監査も求められている。</u>しかしながら、独立行政法人に対する会計監査は、あくまで財務諸表に対する監査が制度の中核であると考え。財務諸表は主務大臣の承認を要する書類であり、会計専門家による</p> <p><u>一般に公正妥当と認められる独立行政法人の会計の基準に準拠しているかどうかの監査</u>が強く要請されるからである。独立行政法人への会計監査については、企業会計における財務諸表監査の考え方を参考とすることにより、会計監査人の専門的な能力や実務面での蓄積を活用することが期待されるものと考え。</p>	<p>○【引用法令名の修正】 「商法監査」→「会社法監査」 (注) 会社法監査には「財務諸表に対する監査」しか規定されていない。このため、「類似した」が「財務諸表に対する監査」のみにかかるよう、修正する。</p> <p>●既出（【準拠する基準の明瞭化】による修正を反映）</p>
<p><b>第2章 監査の前提条件</b> <b>第3節 監査日程の十分な確保</b></p> <p>二重責任の原則の観点から、独立行政法人は、会計監査人への財務諸表を始めとする監査対象書類の提出に当たっては、法人内部において然るべき機関決定を経た上で行わなければならない。</p> <p>独立行政法人は、会計監査人の監査が十分かつ円滑に行われるよう、監査日程の確保に努めなければならない。特に監査対象書類を会計監査人に提出する時期については、通則法第38条に定める期限に対し、少なくとも<u>商法（明治32年法律第48号）や株式会社の監査等に関する商法の特例に関する法律（昭和49年法律第22号。以下「商法特例法」という。）等の類似の規定に定める日程を十分に確保しなければならない。</u></p> <p>上記の趣旨を担保するため、会計監査人と独立行政法人との間で締結される会計監査契約において、必要に応じて、監査日程について明確に定めることが望ましい。</p>	<p><b>第2章 監査の前提条件</b> <b>第3節 監査日程の十分な確保</b></p> <p>二重責任の原則の観点から、独立行政法人は、会計監査人への財務諸表を始めとする監査対象書類の提出に当たっては、法人内部において然るべき機関決定を経た上で行わなければならない。</p> <p>独立行政法人は、会計監査人の監査が十分かつ円滑に行われるよう、監査日程の確保に努めなければならない。特に監査対象書類を会計監査人に提出する時期については、通則法第38条に定める期限に対し、少なくとも<u>会社法（平成17年法律第86号）や会社計算規則（平成18年法務省令第13号）等の類似の規定に定める日程を十分に確保しなければならない。</u></p> <p>上記の趣旨を担保するため、会計監査人と独立行政法人との間で締結される会計監査契約において、必要に応じて、監査日程について明確に定めることが望ましい。</p>	<p>○【引用法令名の修正】 ・「商法」→「会社法」 ・「株式会社の監査等に関する商法の特例に関する法律」→「会社計算規則」</p>
<p><b>第3章 独立行政法人の特性に基づく監査</b> <b>第2節 連結財務諸表監査</b></p> <p>独立行政法人の連結財務諸表は、民間企業の連結財務諸表とはその性格を異にし、独立行政法人に交付された公的資金が更に特定関連会社等に供給されている場合において、独立行政法人のみではなく、特定関連会社等を含め、公的資金がどのように使用されているかを明らかにすることにその主たる目的がある。なお、独立行政法人の評価は個別財務諸表によることとされている。</p> <p>独立行政法人に交付された公的資金が使用された結果は、財務諸表によっ</p>	<p><b>第3章 独立行政法人の特性に基づく監査</b> <b>第2節 連結財務諸表監査</b> (1～2段落目：同左)</p>	

独立行政法人監査基準（現行）	改訂案	改訂案の考え方（案）
<p>て表される。そして、主務大臣、独立行政法人評価委員会、国民等は財務諸表を通じて独立行政法人の評価を行うこととなる。このような財務諸表の役割は、連結財務諸表においても同じであり、連結財務諸表は、独立行政法人に交付された公的資金が、民間企業に供給されたものを含め、効率的に使用されているか等を示すものである。会計監査人の財務諸表監査は、財務諸表の信頼性を担保するものであり、この観点からは、個別財務諸表監査と連結財務諸表監査を区別する理由はなく、連結財務諸表についても、会計監査人による監査が必要である。</p> <p>独立行政法人の特定関連会社及び関連会社への出資は、独立行政法人が業務として行った資金供給目的の出資が大半であり、必ずしも支配従属関係が認められないといった特性が存在するが、特定関連会社及び関連会社についても、監査意見を形成するに足りる合理的な基礎を得るために必要な監査を行わなければならない。なお、監査に当たって、特定関連会社及び関連会社の協力が得られないことから、監査の全部又は一部が実施できなかった場合は、監査報告書にその旨を記載し、除外事項を付した意見表明を行い、あるいは、意見表明のための合理的な基礎を得ることができない場合は、意見を表明してはならない。</p> <p>このように、会計監査人による特定関連会社及び関連会社の監査は、連結財務諸表の適正性を保証する上で必要な監査手続であることから、独立行政法人の長は特定関連会社及び関連会社が監査に協力するよう措置すべきである。なお、特定関連会社及び関連会社の協力が得られないことにより、会計監査人が監査意見表明のための合理的基礎が得られない場合の責任は、独立行政法人の長にある。</p> <p>また、上記の趣旨については、会計監査人と独立行政法人との間で締結される会計監査契約において、明確に定めることが望ましい。</p> <p>特定関連会社及び関連会社が他の会計監査人の監査を受けている場合は、監査の効率化の観点から可能な限り、他の会計監査人の監査結果を利用することが望まれる。なお、この場合においては、会計監査人は、他の会計監査人によって監査された財務諸表の重要性及び他の会計監査人の信頼性の程度を勘案して、他の会計監査人の実施した監査が適切であるかを評価し、他の会計監査人の実施した監査の結果を利用する程度及び方法を決定しなければならない。</p> <p>関連公益法人等については、附属明細書による情報開示に止まり、連結の範囲に含まれないことから、関連公益法人等の財務諸表監査は実施しないこととする。なお、会計監査人は、附属明細書記載事項のうち、独立行政法人</p>	<p>独立行政法人の特定関連会社及び関連会社への出資は、独立行政法人が業務として行った資金供給目的の出資が大半であり、必ずしも支配従属関係が認められないといった特性が存在するが、特定関連会社及び関連会社についても、監査意見を形成するに足りる基礎を得るために必要な監査を行わなければならない。なお、監査に当たって、特定関連会社及び関連会社の協力が得られないことから、監査の全部又は一部が実施できなかった場合は、監査報告書にその旨を記載し、除外事項を付した意見表明を行い、あるいは、意見表明のための基礎を得ることができない場合は、意見を表明してはならない。</p> <p style="text-align: center;">（以下：同左）</p>	<p>○【報告内容（「合理的な」の削除）の明瞭化】</p> <p>・民間基準の改訂と平仄をあわせたもの。（民間基準では、「意見表明のための合理的な基礎」といった場合、適正意見又は不適正意見のどちらの根拠ともなりえるために「合理的な」を削除したことから、独法監査基準も同様に削除する。）</p>

独立行政法人監査基準（現行）	改訂案	改訂案の考え方（案）
<p>の財務諸表により確認可能な事項については監査上の責任を有するが、関連公益法人等の計算書類等によらなければ確認することが困難な事項については、会計監査人の責任外であり、監査報告書において、その旨を明かにする必要がある。</p> <p>なお、主務大臣及び独立行政法人評価委員会が行う独立行政法人の評価は個別財務諸表によることから、連結財務諸表に係る監査報告書は、個別財務諸表に係る監査報告書とは別に作成することとする。</p>		
<p><b>第4章 会計監査人の独立性</b> <b>第1節 被監査独立行政法人に対する独立性について</b></p> <p>通則法第39条に定める会計監査人の監査に当たっては、会計監査人は、被監査独立行政法人に対して、独立の立場にある者でなければならない。</p> <p>この独立性を担保するため、通則法第41条において、<u>商法特例法第4条の規定を準用し、被監査独立行政法人との関係において、経済的・身分的な利害関係を有する者は、会計監査人になれないものとされているところである。</u></p> <p>これに加えて、会計監査人においては、被監査独立行政法人との間の外観的な独立性の確保についても、十分に配慮することが必要である。</p>	<p><b>第4章 会計監査人の独立性</b> <b>第1節 被監査独立行政法人に対する独立性について</b> (1段落目：同左)</p> <p>この独立性を担保するため、通則法第41条において、<u>公認会計士法（昭和23年法律第103号）の規定により、被監査独立行政法人との関係において、経済的・身分的な利害関係を有する者は、会計監査人になれないものとされているところである。</u></p> <p>(3段落目：同左)</p>	<p>○【引用法令名の修正】 「商法特例法」→「公認会計士法」</p>
<p><b>第4章 会計監査人の独立性</b> <b>第4節 監査責任者の交替について</b></p> <p>企業会計の監査ルールでは、大会社等に対する会計監査には、会計監査人の独立性及び監査の品質管理の一層の厳格化が求められることから、監査責任者の交替のルールが定められている。また、平成15年6月の公認会計士法（昭和23年法律第49号）の改正により、同様の趣旨が法定されることとなった。</p> <p>このような観点は、公的な主体である独立行政法人の会計監査においても同様であり、同一の者が、長期間に亘って同一独立行政法人の会計監査を担当することは適切ではないことから、監査責任者の交替ルールを定める必要がある。</p> <p>独立行政法人の会計監査は公認会計士又は監査法人により行われることから、監査責任者の交替ルールは、原則として改正された公認会計士法が規定するルールに準拠することが適当であるが、他方、独立行政法人の基本的な制度である中期目標及び中期計画期間との関連を踏まえたものとする必要がある。</p> <p>具体的には、通則法上、中期目標期間が3年以上5年以下とされているこ</p>	<p><b>第4章 会計監査人の独立性</b> <b>第4節 監査責任者の交替について</b></p> <p>企業会計の監査ルールでは、大会社等に対する会計監査には、会計監査人の独立性及び監査の品質管理の一層の厳格化が求められることから、監査責任者の交替のルールが定められている。また、平成15年6月の公認会計士法の改正により、同様の趣旨が法定されることとなった。</p> <p>(2～4段落目：同左)</p>	<p>○【技術的修正】 ・法律番号等は既出であるため削除する。</p>

独立行政法人監査基準（現行）	改訂案	改訂案の考え方（案）
<p>とにかんがみ、独立行政法人の連続する5事業年度又は中期目標期間の全ての事業年度において会計監査における監査責任者となった者は、その後、会計監査人の独立性及び監査の品質確保の観点から適当と認められる期間は、原則として、当該独立行政法人の会計監査における監査責任者となることができないという監査責任者の交替ルールを確立することが適切であると考え</p>		
<p><b>第5章 会計監査人の地位（職務、権限、義務、責任）</b>  <b>第1節 会計監査人の職務</b>  (3) 会計監査人と主務大臣等との関係について</p> <p>会計監査人と主務大臣、主務省に置かれる独立行政法人評価委員会及び総務省に置かれる政策評価・独立行政法人評価委員会（以下「主務大臣等」という。）との関係について、会計監査人は、通則法第40条の規定に基づき、主務大臣に選任されるものであるが、いわゆる上級庁一下級庁の関係に立つものではなく、主務大臣等は、会計監査人に対して報告を要求する権限を有してはいない。</p> <p>この場合、会計監査人が業務上知り得た被監査独立行政法人の情報を主務大臣等に提供することについて、公認会計士の守秘義務を定めた公認会計士法第27条の正当な理由に該当するかどうか問題となる。正当な理由に該当するかどうかの判断は、情報提供により失われる当該法人の利益と、主務大臣等に情報が提供されることにより得られる利益を比較衡量すべきものと解されている。この点については、</p> <p>① 株式会社の場合、原則として定時総会で財務諸表の承認を得ることとされているが、<u>商法特例法第17条第2項</u>の規定に基づき定時総会の決議があったときは、会計監査人は、定時総会に出席して意見を述べなければならない。この場合、公認会計士の守秘義務は解除されるものと解されている。独立行政法人においても、主務大臣から財務諸表の承認を受けるとされており、その際に主務大臣は独立行政法人評価委員会の意見を聴くこととされている。また、会計監査人は、株式会社では株主総会で選任されるのに対し、独立行政法人では主務大臣が選任することとされている。</p> <p>したがって、少なくとも財務諸表の承認に関しては、会計監査人が主務大臣等に対して情報提供を行うことに正当な理由があると解すべきである。</p> <p>② 独立行政法人制度は、法人に対する国の事前関与を最小限にする一方、各府省に置かれる独立行政法人評価委員会及び総務省に置かれる政策評価・独立行政法人評価委員会による事後チェックが極めて重要なものと位</p>	<p><b>第5章 会計監査人の地位（職務、権限、義務、責任）</b>  <b>第1節 会計監査人の職務</b>  (3) 会計監査人と主務大臣等との関係について</p> <p style="text-align: center;">（1、2段落目：同左）</p> <p>① 株式会社の場合、原則として定時総会で財務諸表の承認を得ることとされているが、<u>会社法第398条第2項</u>の規定に基づき定時総会の決議があったときは、会計監査人は、定時総会に出席して意見を述べなければならない。この場合、公認会計士の守秘義務は解除されるものと解されている。独立行政法人においても、主務大臣から財務諸表の承認を受けるとされており、その際に主務大臣は独立行政法人評価委員会の意見を聴くこととされている。また、会計監査人は、株式会社では株主総会で選任されるのに対し、独立行政法人では主務大臣が選任することとされている。</p> <p>したがって、少なくとも財務諸表の承認に関しては、会計監査人が主務大臣等に対して情報提供を行うことに正当な理由があると解すべきである。</p> <p>② （1～4段落目：同左）</p>	<p>○【引用法令名の修正】  「商法」→「会社法」</p>

独立行政法人監査基準（現行）	改訂案	改訂案の考え方（案）
<p>置付けられている。また、独立行政法人はいわゆる公法人であり、その情報を外部へ開示する必要性が民間と比べて高い。</p> <p>したがって、会計監査人が主務大臣等に対して情報を提供することにつき正当な理由があると考えられる範囲は、財務諸表の承認にとどまらず、法令の規定による事後チェック等のために必要なことにも及ぶと解することが適当である。</p> <p>以上を踏まえると、会計監査人は、業務上知り得た被監査独立行政法人の情報について、財務諸表の承認や業務実績に対する事後評価等に関し主務大臣等に情報提供を行うことができることとすることが適切である。</p> <p>ただし、独立行政法人制度上、法人に対する国の事前関与は最小限とされており、主務大臣等への報告事項も法令に限定されていることから、主務大臣等が情報提供を求めるのは、法令に規定された権限の行使に関連した事項に限るべきである。主務大臣等が会計監査人に対し情報提供を求める際は、その情報が、どういう権限の行使のために必要と考えられるかに関し法令上の根拠を示す必要がある。</p> <p>独立行政法人制度においては、<u>商法特例法第17条</u>に相当する規定が存在しないため、法令の解釈に関する無用のリスクを回避する観点から、上記の趣旨を踏まえて、会計監査契約において予め合意をしておく必要がある。具体的には、主務大臣等から法令に規定された権限の行使のために必要があるとして求められた場合、又はこの監査基準において主務大臣に報告すべきことが求められている場合には、会計監査人が主務大臣等に対し業務上知り得た被監査独立行政法人の情報を提供することについて、包括的に同意しておくべきである。</p> <p>他方、会計監査人は、主務大臣等が法令上規定する権限の行使に伴い必要とされる場合には、主務大臣等に対して適時かつ適切に情報の提供を行うことが期待される。</p> <p>なお、会計監査人が被監査独立行政法人の同意を得て、業務上知り得た被監査独立行政法人の情報を提供した場合であっても、会計監査人が当該行為により第三者に損害を与えた場合は、被監査独立行政法人の同意を得ていることをもって、会計監査人は、当該第三者に対する不法行為責任等を当然に免れるものではない。</p>	<p>独立行政法人制度においては、<u>会社法第398条</u>に相当する規定が存在しないため、法令の解釈に関する無用のリスクを回避する観点から、上記の趣旨を踏まえて、会計監査契約において予め合意をしておく必要がある。具体的には、主務大臣等から法令に規定された権限の行使のために必要があるとして求められた場合、又はこの監査基準において主務大臣に報告すべきことが求められている場合には、会計監査人が主務大臣等に対し業務上知り得た被監査独立行政法人の情報を提供することについて、包括的に同意しておくべきである。</p> <p>（6～7段落目：同左）</p>	<p>○【引用法令名の修正】 「商法特例法」→「会社法」</p>

独立行政法人監査基準（現行）	改訂案	改訂案の考え方（案）
<p>第6章 独立行政法人に対する会計監査人の監査の基準</p> <p>第2節 監査の目的</p> <p>1 通則法第39条に定める会計監査人の監査の目的は、独立行政法人が通則法並びに独立行政法人会計基準及び同注解に基づき作成した財務諸表等が、独立行政法人の財政状態、運営状況等財務運営の状況をすべての重要な点において適正に表示しているかどうかについて、会計監査人が自ら入手した監査証拠に基づいて判断した結果を<b>意見</b>として表明することにある。</p>	<p>第6章 独立行政法人に対する会計監査人の監査の基準</p> <p>第2節 監査の目的</p> <p>1 通則法第39条に定める会計監査人の監査の目的は、独立行政法人が通則法及び一般に公正妥当と認められる独立行政法人の会計の基準に基づき作成した財務諸表等が、独立行政法人の財政状態、運営状況等財務運営の状況をすべての重要な点において適正に表示しているかどうかについて、会計監査人が自ら入手した監査証拠に基づいて判断した結果を<b>意見等</b>として表明することにある。</p>	<p>●既出（【<b>準拠する基準の明瞭化</b>】による修正を反映）</p> <p>○【<b>監査報告の明確な区分（意見「等」の追加）</b>】</p> <p>※「等」＝「報告」を追加</p> <p>・民間基準の改訂により、監査意見を「財務諸表に対する<b>意見</b>」と「それ以外の<b>報告</b>」に厳密に峻別（→財務諸表以外の監査対象書類の監査結果には、<b>意見</b>表明ではなく<b>報告</b>扱い）することとされた。これを受け、独法監査基準においても、同様の峻別をする必要があることから「等」を追加する。</p>
<p>第6章 独立行政法人に対する会計監査人の監査の基準</p> <p>第3節 一般基準</p> <p>8 会計監査人は、監査を行うに当たって、指揮命令の系統及び職務の分担を明らかにし、当該監査に従事する補助者に対して適切な指示、指導及び監督を行わなければならない。また、会計監査人は、自らの組織としても、すべての監査がこの<b>監査基準及び一般に公正妥当と認められる企業会計の監査の基準に準拠して</b>適切に実施されるために必要な管理の方針と手続きを定め、これらに従って監査が実施されていることを確かめなければならない。</p>	<p>第6章 独立行政法人に対する会計監査人の監査の基準</p> <p>第3節 一般基準</p> <p>8 会計監査人は、監査を行うに当たって、指揮命令の系統及び職務の分担を明らかにし、当該監査に従事する補助者に対して適切な指示、指導及び監督を行わなければならない。また、会計監査人は、自らの組織としても、すべての監査が<b>一般に公正妥当と認められる独立行政法人の監査の基準に準拠して</b>適切に実施されるために必要な管理の方針と手続きを定め、これらに従って監査が実施されていることを確かめなければならない。</p>	<p>●既出（【<b>準拠する基準の明瞭化</b>】と同じ）</p> <p>（注）準拠する会計基準と同様、独法監査において準拠する監査基準は、①独法監査基準、②民間監査基準、が一体で適用されているという実態を踏まえ、この際、この実態にあわせた規定ぶりに修正する。</p>
<p>第6章 独立行政法人に対する会計監査人の監査の基準</p> <p>第4節 実施基準</p> <p>第1 基本原則</p> <p>3 会計監査人は、自己の意見を形成するに足る<b>合理的な基礎</b>を得るために、</p>	<p>第6章 独立行政法人に対する会計監査人の監査の基準</p> <p>第4節 実施基準</p> <p>第1 基本原則</p> <p>3 会計監査人は、自己の意見を形成するに足る<b>基礎</b>を得るために、</p>	<p>●既出（【<b>報告内容（「合理的な」の削除）の明瞭化</b>】と同じ）</p>

独立行政法人監査基準（現行）	改訂案	改訂案の考え方（案）
<p>実在性、網羅性、権利と義務の帰属、評価の妥当性、期間配分の適切性及び表示の妥当性等の監査要点に適合した十分かつ適切な監査証拠を入手しなければならない。</p>	<p>独立行政法人の長が提示する財務諸表等項目に対して、実在性、網羅性、権利と義務の帰属、評価の妥当性、期間配分の適切性及び表示の妥当性等の監査要点を設定し、これらに適合した十分かつ適切な監査証拠を入手しなければならない。</p>	<p>○【二重責任（「独立行政法人の長」の追加）の明確化】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・民間基準の改訂により、財務諸表項目の提示主体を明確化することとされた。これにあわせ、独法監査基準も同様の修正を行う。</li> </ul> <p>（注）この際、民間監査基準の規定ぶり（「監査要点に適合」→「監査要点を設定し、これらに適合」に修正）にあわせる。</p>
<p>第6章 独立行政法人に対する会計監査人の監査の基準 第4節 実施基準 第3 監査の実施 7 (1) 財務諸表等の作成責任は独立行政法人の長にある旨 (2) 財務諸表等は</p> <p>独立行政法人会計基準及び同注解並びに一般に公正妥当と認められる会計基準に準拠して適正に作成している旨</p> <p>(3) 財務諸表等及びその作成の基礎となる会計記録に適切に記録していない重要な取引はない旨 (4) 財務諸表等に重要な影響を与える不正及び違法行為はない旨 (5) 適正な財務諸表等を作成するため、及び財務諸表等に重要な影響を与える法令に準拠していることを確保するため、有効な内部統制を確立し、維持する責任は独立行政法人の長にある旨 (6) 監査の実施に必要なすべての資料は会計監査人に提供した旨 (7) 重要な偶発事象及び後発事象</p>	<p>第6章 独立行政法人に対する会計監査人の監査の基準 第4節 実施基準 第3 監査の実施 7 (1) 財務諸表等の作成責任は独立行政法人の長にある旨 (2) 財務諸表（利益の処分又は損失の処理に関する書類（案）（以下「利益処分案」という。）を除く。）は</p> <p>一般に公正妥当と認められる独立行政法人の会計の基準に準拠して適正に作成している旨</p> <p>(3) 利益処分案は法令に適合して作成している旨 (4) 業務運営の状況を正しく示す事業報告書を作成している旨 (5) 独立行政法人の長による予算の区分に従い決算の状況を正しく示す決算報告書を作成している旨 (6) 財務諸表等及びその作成の基礎となる会計記録に適切に記録していない重要な取引はない旨 (7) 財務諸表等に重要な影響を与える不正及び違法行為はない旨 (8) 適正な財務諸表等を作成するため、及び財務諸表等に重要な影響を与える法令に準拠していることを確保するため、有効な内部統制を確立し、維持する責任は独立行政法人の長にある旨 (9) 監査の実施に必要なすべての資料は会計監査人に提供した旨 (10) 重要な偶発事象及び後発事象</p>	<p>○【監査報告の明確な区分（財務諸表「等」の削除）】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・民間監査基準の改訂により、監査対象書類を「財務諸表」と「それ以外の書類」にそれぞれ明確に区分することとなった。これを受け、独法において「財務諸表等」として一体整理していた監査対象書類も同様に、それぞれ別区分とするよう規定を修正する。</li> </ul> <p>●既出（【準拠する基準の明瞭化】と同じ）</p> <p>（注）「利益処分案」、「事業報告書」及び「決算報告書」の規定ぶりは、現行基準（第6章第5節第3）を参照したもの</p>



独立行政法人監査基準（現行）	改訂案	改訂案の考え方（案）
<p>第6章 独立行政法人に対する会計監査人の監査の基準</p> <p>第5節 報告基準</p> <p>第1 基本原則</p> <p>1 会計監査人は、独立行政法人が</p> <p>作成した財務諸表等に対して、次に掲げる事項について意見を表明した監査報告書を作成しなければならない。</p> <p>(1) 財務諸表が</p> <p>独立行政法人の財政状態、運営状況、キャッシュ・フローの状況及び行政サービス実施コストの状況をすべての重要な点において適正に表示しているかどうか</p> <p>(2) 事業報告書が独立行政法人の業務運営の状況を正しく示しているかどうか</p> <p>(3) 決算報告書が独立行政法人の長による予算の区分に従って決算の状況を正しく示しているかどうか</p>	<p>第6章 独立行政法人に対する会計監査人の監査の基準</p> <p>第5節 報告基準</p> <p>第1 基本原則</p> <p>1 会計監査人は、独立行政法人の<u>長</u>が</p> <p>作成した財務諸表等に対して、次に掲げる事項について意見等を表明した監査報告書を作成しなければならない。</p> <p>(1) 財務諸表（<u>利益処分案を除く。以下同じ。</u>）が</p> <p><u>一般に公正妥当と認められる独立行政法人の会計の基準に準拠して</u>独立行政法人の財政状態、運営状況、キャッシュ・フローの状況及び行政サービス実施コストの状況をすべての重要な点において適正に表示しているかどうか</p> <p>(2) <u>利益処分案が法令に適合している</u>かどうか</p> <p>(3) <u>事業報告書（会計に関する部分に限る。）</u>が独立行政法人の業務運営状況を正しく示しているかどうか</p> <p>(4) （決算報告書：同左）</p>	<p>○【<b>二重責任（独立行政法人「の長」の追加）の明確化</b>】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・作成主体が明確となるよう修正する。</li> </ul> <p>●既出（【<b>監査報告の明確な区分（意見「等」の追加）</b>】と同じ）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>※「等」＝「報告」を追加</li> </ul> <p>●既出（【<b>監査報告の明確な区分（財務諸表「等」の削除）</b>】と同じ）</p> <p>●既出（【<b>準拠する基準の明瞭化</b>】と同じ）</p> <p>○【<b>技術的修正</b>】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・通則法上、事業報告書の監査対象は、「事業報告書（<u>会計に関する部分に限る。</u>）」を正確に引用する。</li> </ul>
<p>2 財務諸表等に対する意見表明には、財務諸表等に重要な影響を与える不正及び誤謬並びに違法行為がないかどうかについての意見表明を含むものでなければならない。</p>	<p>2 財務諸表に対する意見表明には、財務諸表に重要な影響を与える不正及び誤謬並びに違法行為がないかどうかについての意見表明を含むものでなければならない。</p>	<p>●既出（【<b>監査報告の明確な区分（財務諸表「等」の削除）</b>】と同じ）</p>
<p>5 会計監査人は、財務諸表が独立行政法人の財政状態、運営状況、キャッシュ・フローの状況及び行政サービス実施コストの状況をすべての重要な点において適正に表示しているかどうかの判断に当たっては、独立行政法人の長が採用した会計方針が、<u>独立行政法人会計基準及び同注解並びに一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して継続的に適用されている</u>かどうかのみならず、その選択及び適用方法が会計事象や取引を適切に反映するものであるかどうか並びに財務諸表の表示方法が適切であるかどうかについても評価しなければならない。</p>	<p>5 会計監査人は、財務諸表が独立行政法人の財政状態、運営状況、キャッシュ・フローの状況及び行政サービス実施コストの状況をすべての重要な点において適正に表示しているかどうかの判断に当たっては、独立行政法人の長が採用した会計方針が、<u>一般に公正妥当と認められる独立行政法人の会計の基準に準拠して継続的に適用されている</u>かどうかのみならず、その選択及び適用方法が会計事象や取引を適切に反映するものであるかどうか並びに財務諸表の表示方法が適切であるかどうかについても評価しなければならない。</p>	<p>●既出（【<b>準拠する基準の明瞭化</b>】と同じ）</p>
<p>6 会計監査人は、監査意見の表明に当たっては、監査リスクを合理的に低い水準に抑えた上で、自己の意見を形成するに足る<u>合理的な</u>基礎を得なければならない。</p>	<p>6 会計監査人は、監査意見の表明に当たっては、監査リスクを合理的に低い水準に抑えた上で、自己の意見を形成するに足る基礎を得なければならない。</p>	<p>●既出（【<b>報告内容（「合理的な」の削除）の明瞭化</b>】と同じ）</p>

独立行政法人監査基準（現行）	改訂案	改訂案の考え方（案）
8 会計監査人は、重要な監査手続を実施できなかったことにより、自己の意見を形成するに足る合理的な基礎を得られないときは、意見を表明してはならない。	8 会計監査人は、重要な監査手続を実施できなかったことにより、自己の意見を形成するに足る基礎を得られないときは、意見を表明してはならない。	●既出（【報告内容（「合理的な」の削除）の明瞭化】と同じ）
9 会計監査人は、意見の表明に先立ち、自らの意見が独立行政法人に対する会計監査人の監査の基準及び一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して適切に形成されていることを確かめるため、意見表明に関する審査を受けなければならない。	9 会計監査人は、意見の表明に先立ち、自らの意見が一般に公正妥当と認められる独立行政法人の監査の基準に準拠して適切に形成されていることを確かめるため、意見表明に関する審査を受けなければならない。	●既出（【準拠する基準の明瞭化】と同じ） （注）規定上、重複することとなる「独立行政法人に対する」は削除する。
<p>第6章 独立行政法人に対する会計監査人の監査の基準</p> <p>第5節 報告基準</p> <p>第2 監査報告書の記載区分</p> <p>1 会計監査人は、監査報告書において、監査の対象、<b>実施した監査の概要及び財務諸表等に対する意見</b>を明瞭かつ簡潔に記載しなければならない。ただし、意見を表明しない場合には、その旨を監査報告書に記載しなければならない。</p>	<p>第6章 独立行政法人に対する会計監査人の監査の基準</p> <p>第5節 報告基準</p> <p>第2 監査報告書の記載区分</p> <p>1 会計監査人は、監査報告書において、監査の対象、<b>独立行政法人の長の責任、会計監査人の責任及び会計監査人の意見</b>を明瞭かつ簡潔に<b>それぞれを区分した上で、記載</b>しなければならない。ただし、意見等を表明しない場合には、その旨を監査報告書に記載しなければならない。</p>	<p>○【報告内容（記載事項の追加）の明瞭化】</p> <p>・民間監査基準において、「監査報告書の記載区分」について改訂（記載事項に経営者の責任などが加えられ、これら記載事項を区分して明記することが求められる。）が行われたことから、これにあわせ、独法監査基準も同様の修正を行う。</p> <p>※この際、全文を民間基準における規定ぶりにあわせる。</p>
2 会計監査人は、財務諸表等の表示が適正であると判断し、その判断に関して説明を付す必要がある事項及び財務諸表等の記載について強調する必要がある事項を監査報告書において情報として追記する場合には、意見の表明とは明確に区別しなければならない。	2 会計監査人は、財務諸表の記載について強調する必要がある事項及び説明を付す必要がある事項を監査報告書において情報として追記する場合には、意見の表明とは明確に区別しなければならない。	●既出（【監査報告の明確な区分（財務諸表「等」の削除）】と同じ） （注）民間基準の改訂により、「追記情報」の規定ぶりが修正（強調や説明追記の対象は「適正意見」に限定しない。）されたことから、この際、民間監査基準の整理・規定ぶりにあわせる。

独立行政法人監査基準（現行）	改訂案	改訂案の考え方（案）
<p style="text-align: center;">（新設）</p>	<p>4 会計監査人は、利益処分案及び決算報告書に対する意見並びに事業報告書（会計に関する部分に限る。）に対する報告については、財務諸表に対する監査とは別の区分を設けて監査報告書に記載しなければならない。</p>	<p>○【監査報告の明確な区分】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・民間基準の改訂により、「財務諸表に対する意見」と「それ以外の報告」に明確に区分することが必要となったことから、それぞれを区分することを新たに規定する。</li> <li>※意見「等」＝意見「及び報告」</li> <li>（注）独法における区分は、上記2区分ではなく、通則法により「利益処分案」及び「決算報告書」に対し「監査人の意見」が必要といった特殊な位置づけとなっていることから、「財務諸表に対する意見」、「利益処分案と決算報告書に対する意見」、「その他報告（事業報告書）」の3区分とすることが適当。</li> </ul>
<p>第6章 独立行政法人に対する会計監査人の監査の基準 第5節 報告基準 第3 無限定適正意見の記載事項 1 会計監査人は、独立行政法人の</p> <p>作成した財務諸表等が、 次に掲げる事項の全てにおいて適正に表示していると認められ、</p> <p>かつ、財務諸表等に重要な影響を与える不正及び誤謬並びに違法行為がないと判断したときは、その旨の意見（この場合の意見を「無限定適正意見」という。）を表明しなければならない。</p>	<p>第6章 独立行政法人に対する会計監査人の監査の基準 第5節 報告基準 第3 無限定適正意見の記載事項 1 会計監査人は、独立行政法人の長の</p> <p>作成した財務諸表が、 一般に公正妥当と認められる独立行政法人の会計の基準に準拠して、独立行政法人の財政状態、運営状況、キャッシュ・フローの状況及び行政サービス実施コストの状況をすべての重要な点において適正に表示していると認められ</p> <p>ると判断したときは、その旨の意見（この場合の意見を「無限定適正意見」という。）を表明しなければならない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●既出（【二重責任（独立行政法人の「長」の追加）の明確化】と同じ）</li> <li>●既出（【監査報告の明確な区分（財務諸表「等」の削除）】と同じ）</li> <li>（注）本項では、「財務諸表」についてのみ規定することから、現行基準(1)を本文に組み入れ、財務諸表以外の書類を示す「等」を削除し、別項で規定し直す。</li> <li>●既出（【準拠する基準の明瞭化】と同じ）</li> <li>○【不正誤謬等の意見表明の明確化】</li> <li>・民間基準では、不正誤謬等の有無は、個別意見表明ではなく、財務諸表に対する意見表明の中で重要な不正等が見あたらなかったということをもって判断させている。一方、独法監査基準では、財務諸表等に対して個別意見を表明することになっていることから、取扱いに相違が生じている。そこで、この際、民間監査基準と同様の取扱いとなるよう改</li> </ul>

独立行政法人監査基準（現行）	改訂案	改訂案の考え方（案）
<p>(1) 財務諸表が独立行政法人の財政状態、運営状況、キャッシュ・フローの状況及び行政サービス実施コストの状況をすべての重要な点において適正に表示しているかどうか</p> <p>(2) 事業報告書が独立行政法人の業務運営の状況を正しく示しているかどうか</p> <p>(3) 決算報告書が独立行政法人の長による予算の区分に従って決算の状況を正しく示しているかどうか</p>	<p>(1)～(3) (削除)</p>	<p>訂を行う。</p> <p>(注) この際、民間基準にあわせ、「財務諸表」に係る不正及び誤謬並びに違法行為に係る意見表明は、次項（P12）の「監査人の責任」で規定する。</p> <p>※(1) →本文へ組み入れ</p> <p>(2)及び(3) → 別項で規定</p>
<p>2 会計監査人は、無限定適正意見を表明する場合には、監査報告書に次の記載を行うものとする。</p> <p>(1) 監査の対象</p> <p>監査対象として財務諸表等の範囲、財務諸表等の作成責任は独立行政法人の長にあること、会計監査人の責任は独立の立場から財務諸表等に対する意見を表明することにあること</p> <p>(2) 実施した監査の概要</p> <p>独立行政法人に対する会計監査人の監査の基準及び一般に公正妥当と認められる監査基準に準拠して監査を行ったこと、監査の基準は会計監査人に財務諸表等に重要な虚偽の表示がないかどうかの合理的な保証を得ることを求めていること、監査は試査を基礎として行われていること、監査は独立行政法人の長が採用した会計方針及びその適用方法並びに独立行政法人の長によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表等の表示を検討していること、財務諸表等の重要な虚偽の表示をもたらす違法行為の有無について検討していること、監査の結果として意見表明のための合理的な基礎を得たこと</p>	<p>2 会計監査人は、無限定適正意見を表明する場合には、監査報告書に次の記載を行うものとする。</p> <p>(1) 監査の対象</p> <p>監査対象とした財務諸表の範囲</p> <p>(2) 独立行政法人の長の責任</p> <p>財務諸表の作成責任は独立行政法人の長にあること、財務諸表に重要な虚偽の表示がないように内部統制を整備及び運用する責任は独立行政法人の長にあること</p> <p>(3) 会計監査人の責任</p> <p>会計監査人の責任は、独立の立場から、財務諸表に対する意見を表明することにあること、一般に公正妥当と認められる独立行政法人の監査の基準に準拠して監査を行ったこと、監査の基準は会計監査人に財務諸表に重要な虚偽の表示がないかどうかの合理的な保証を得ることを求めていること、監査は財務諸表項目に関する監査証拠を得るための手続を含むこと、監査は独立行政法人の長が採用した会計方針及びその適用方法並びに独立行政法人の長によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討していること、監査手続の選択及び適用は会計監査人の判断によること、財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないこと、監査の結果として入手した監査証拠が意見表明の基礎を与える十分かつ適切なものであること、当該基礎には会計監査人が監査を実施し</p>	<p>●既出（【監査報告の枠組みの明確な区分】と同じ）</p> <p>(注) 本項では、「財務諸表」についてのみ規定することから、財務諸表以外の書類については「等」を削除し、別項で規定する。）</p> <p>(注) この際、全文を民間基準の規定ぶりにあわせる。</p> <p>○【報告内容（記載事項の追加）の明瞭化】</p> <p>・民間基準の改訂により、監査報告書の記載事項として、「経営者の責任」や「監査人の責任」が新たに加えられたことから、民間基準にあわせて規定する。</p> <p>※この際、全文を民間基準の項目立て・規定ぶりにあわせる。</p>

独立行政法人監査基準（現行）	改訂案	改訂案の考え方（案）
<p>(3) 財務諸表等に対する監査結果</p> <p>(ア) 財務諸表（利益の処分に関する書類(案)を除く。）が</p> <p>独立行政法人会計基準及び同注解並びに一般に公正妥当と認められる会計基準に準拠して、独立行政法人の財政状態、運営状況、キャッシュ・フローの状況及び行政サービス実施コストの状況をすべての重要な点において適正に表示していると認められること</p> <p>(イ) 利益の処分に関する書類(案)が法令に適合していると認められること</p> <p>(ウ) 事業報告書が独立行政法人の業務運営の状況を正しく示していると認められること</p> <p>(エ) 決算報告書が独立行政法人による予算の区分に従って決算の状況を正しく示していると認められること</p> <p>(オ) 財務諸表等に重要な影響を与える不正及び誤謬並びに違法行為がないと認められること</p>	<p>た範囲においては、財務諸表に重要な虚偽の表示をもたらす独立行政法人の長又はその他の役員若しくは職員による不正及び誤謬並びに違法行為の存在は認められなかったとの事実を含んでいること</p> <p>(4) 監査意見</p> <p>財務諸表が</p> <p>一般に公正妥当と認められる独立行政法人の会計の基準に準拠して、独立行政法人の財政状態、運営状況、キャッシュ・フローの状況及び行政サービス実施コストの状況をすべての重要な点において適正に表示していると認められること</p> <p>(イ)～(オ)：削除</p>	<p>(注) 民間基準並びで「不正及び誤謬並びに違法行為の存在」は、第6章第5節第3「無限定適正意見の記載事項」から移動</p> <p>○【技術的修正】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・括弧書きについては、既に「同節第1 基本原則」にて、「利益処分案を除く。以下同じ。」と規定しているため削除する。</li> </ul> <p>●既出（【準拠する基準の明瞭化】と同じ）</p> <p>●既出（【監査報告の明確な区分（財務諸表「等」の削除）】と同じ）</p> <p>(注) 本項では、「財務諸表」についてのみ規定することから、財務諸表以外の書類については「等」を削除し、別項で規定する。）</p> <p>●既出（【不正誤謬等の意見表明の明確化】と同じ）</p> <p>(注) 民間基準と並びで「監査人の責任」で規定する。</p>

独立行政法人監査基準（現行）	改訂案	改訂案の考え方（案）
<p>第6章 独立行政法人に対する会計監査人の監査の基準</p> <p>第5節 報告基準</p> <p>第4 意見に関する除外</p> <p>1 会計監査人は、独立行政法人が採用した会計方針の選択及びその適用方法、財務諸表等</p> <p>の表示方法に関して不適切なものがあり、<u>無限定適正意見を表明することができない場合において、その影響が財務諸表等を全体として虚偽の表示に当たるとするほどには重要でない</u>と判断したときには、除外事項を付した限定付適正意見を表明しなければならない。この場合には、<u>財務諸表等に対する意見において、除外した不適切な事項及び財務諸表に与えている影響を記載しなければならない。</u></p>	<p>第6章 独立行政法人に対する会計監査人の監査の基準</p> <p>第5節 報告基準</p> <p>第4 意見に関する除外</p> <p>1 会計監査人は、独立行政法人が採用した会計方針の選択及びその適用方法、財務諸表</p> <p>の表示方法に関して不適切なものがあるか、<u>又は不正及び誤謬並びに違法行為があつて、その影響が無限定適正意見を表明することができない程度に重要ではあるものの、財務諸表を全体として虚偽の表示に当たるとするほどではない</u>と判断したときには、除外事項を付した限定付適正意見を表明しなければならない。この場合には、<u>別に区分を設けて</u>、除外した不適切な事項及び財務諸表に与えている影響を記載しなければならない。</p>	<p>●既出（【監査報告の明確な区分（財務諸表「等」の削除）】と同じ）</p> <p>○【報告内容の明瞭化】</p> <p>・民間基準の改訂により、「意見に対する除外」について改訂（除外事項を付した限定付適正意見を表明した場合は、除外事項などを別区分を設け記載することが求められる。）が行われたことから、これにあわせ、独法監査基準も同様の修正を行う。</p> <p>※この際、民間基準における規定ぶりにあわせる。（ただし、次項の「不適正意見」を表明する場合の規定と平仄をとるべく、「不正及び誤謬並びに違法行為があつて」との記載を追加する。）</p>
<p>2 会計監査人は、独立行政法人が採用した会計方針の選択及びその適用方法、財務諸表等の表示方法に関して<u>著しく不適切なものがあり、財務諸表等が全体として虚偽の表示に当たると判断した場合、又は財務諸表等に重要な影響を与える不正及び誤謬並びに違法行為があると判断した場合には、財務諸表等に対する意見において、財務諸表等が不適正である旨及びその理由を記載しなければならない。</u></p>	<p>2 会計監査人は、独立行政法人が採用した会計方針の選択及びその適用方法、財務諸表の表示方法に関して不適切なものがあるか、<u>又は財務諸表に重要な影響を与える不正及び誤謬並びに違法行為があつて、その影響が財務諸表全体として虚偽の表示に当たるとするほどに重要であると判断した場合には、財務諸表が不適正である旨の意見を表明しなければならない。この場合には、別に区分を設けて、財務諸表が不適正であるとした理由を記載しなければならない。</u></p>	<p>●既出（【監査報告の明確な区分（財務諸表「等」の削除）】と同じ）</p> <p>○【報告内容の明瞭化】</p> <p>・民間監査基準において、「意見に対する除外」について改訂（虚偽表示と判断した場合、別区分を設け不適正理由を記載することが求められる。）が行われたことから、これにあわせ、独法監査基準も同様の修正を行う。</p> <p>※この際、民間基準における規定ぶりにあわせる。（ただし、「財務諸表に重要な影響を与える不正及び誤謬並びに違法行為」は民間基準では規定されていないが、独法監査基準では、これが虚偽表示の一部となりうることを明示的に示すよう規定を残す。）</p>

独立行政法人監査基準（現行）	改訂案	改訂案の考え方（案）
		<p>(注) 現行基準では、「財務諸表等に重要な影響を与える不正及び誤謬並びに違法行為があると判断した場合」には、直ぐさま「不適正意見」を表示するような規定ぶりとなっているが、独法及び民間の監査の実務では、財務諸表に重要な影響を与える不正誤謬等があり、かつその影響が財務諸表全体を虚偽表示に当たるとするほど重要なものである場合に限り「不適正意見」を表示することとなっていることから、この際、実務上の取扱いに適合する表現ぶりに修正する。</p>
<p>第6章 独立行政法人に対する会計監査人の監査の基準  第5節 報告基準  第5 監査範囲の制約  1 会計監査人は、重要な監査手続を実施できなかったことにより、無限定適正意見を表明することができない場合において、その影響が財務諸表等に対する意見表明ができないほどには重要でないと判断したときには、除外事項を付した限定付適正意見を表明しなければならない。この場合には、実施した監査の概要において実施できなかった監査手続を記載し、財務諸表等に対する意見において当該事実が影響する事項を記載しなければならない。</p>	<p>第6章 独立行政法人に対する会計監査人の監査の基準  第5節 報告基準  第5 監査範囲の制約  1 会計監査人は、重要な監査手続を実施できなかったことにより、無限定適正意見を表明することができない場合において、その影響が財務諸表全体に対する意見表明ができないほどではないと判断したときには、除外事項を付した限定付適正意見を表明しなければならない。この場合には、別に区分を設けて、実施できなかった監査手続及び当該事実が影響する事項を記載しなければならない。</p>	<p>●既出（【監査報告の明確な区分（財務諸表「等」の削除）】と同じ）  ○【報告内容の明瞭化】  ・民間監査基準において、「監査範囲の制約」について改訂（①除外事項を付した限定付適正意見を表明する場合は、重要な監査手続が実施できなかったかどうか、その影響が広範かどうかで判断すること、②その場合は、実施できなかった監査手続などを別区分を設け記載すること、が求められる）が行われたことから、これにあわせ、独法監査基準も同様の修正を行う。  ※この際、全文を民間基準における規定ぶりにあわせる。</p>

独立行政法人監査基準（現行）	改訂案	改訂案の考え方（案）
<p>2 会計監査人は、重要な監査手続を実施できなかったことにより、財務諸表等に対する意見表明のための合理的な基礎</p> <p>を得ることができなかつたときには、意見を表明してはならない。この場合には、財務諸表等に対する意見を表明しない旨及びその理由を記載しなければならない。</p>	<p>2 会計監査人は、重要な監査手続を実施できなかったことにより、財務諸表全体</p> <p>に対する意見表明のための基礎</p> <p>を得ることができなかつたときには、意見を表明してはならない。この場合には、別に区分を設けて、財務諸表に対する意見を表明しない旨及びその理由を記載しなければならない。</p>	<p>●既出（【監査報告の明確な区分（財務諸表「等」の削除）】と同じ）</p> <p>●既出（【報告内容（「合理的な」の削除）の明瞭化】と同じ）</p> <p>○【報告内容の明瞭化】</p> <p>・民間監査基準において、「監査範囲の制約」について改訂（意見表明をしない旨とその理由を別区分を設け記載することが求められる。）が行われたことから、これにあわせ、独法監査基準も同様の修正を行う。</p> <p>※この際、全文を民間基準における規定ぶりにあわせる。</p>
<p>第6章 独立行政法人に対する会計監査人の監査の基準</p> <p>第5節 報告基準</p> <p>第6 追記情報</p> <p>会計監査人は、次に掲げる事項その他説明又は強調することが適当と判断した事項は、監査報告書に情報として追記するものとする。</p> <p>(1) 正当な理由による会計方針の変更</p> <p>(2) 重要な偶発事象</p> <p>(3) 重要な後発事象</p> <p>(4) 監査した財務諸表を含む開示書類における当該財務諸表の表示とその他の記載内容との重要な相違</p>	<p>第6章 独立行政法人に対する会計監査人の監査の基準</p> <p>第5節 報告基準</p> <p>第6 追記情報</p> <p>会計監査人は、次に掲げる強調すること又はその他説明することが適当と判断した事項は、監査報告書にそれらを区分した上で、情報として追記するものとする。</p> <p>(1) 正当な理由による会計方針の変更</p> <p>(2) 重要な偶発事象</p> <p>(3) 重要な後発事象</p> <p>(4) 監査した財務諸表を含む開示書類における当該財務諸表の表示とその他の記載内容との重要な相違</p>	<p>○【報告内容の明瞭化】</p> <p>・民間監査基準において、「追記情報」について改訂（「強調する事項」と「その他説明する事項」を明確に区分して説明することが求められる。）が行われたことから、これにあわせ、独法監査基準も同様の修正を行う。</p> <p>※この際、全文を民間基準における規定ぶりにあわせる。</p>



独立行政法人監査基準（現行）	改訂案	改訂案の考え方（案）
<p style="text-align: center;">（新設）</p>	<p><b>第6章 独立行政法人に対する会計監査人の監査の基準</b></p> <p><b>第5節 報告基準</b></p> <p><b>第7 通則法が要求する利益処分案及び決算報告書に対する意見</b></p> <p>1 会計監査人は、独立行政法人の長の作成した利益処分案及び決算報告書について以下の意見を表明しなければならない。</p> <p>(1) 利益処分案が法令に適合しているかどうか</p> <p>(2) 決算報告書が独立行政法人の長による予算の区分に従って決算の状況を正しく示しているかどうか</p> <p>2 会計監査人は、独立行政法人通則法（以下「通則法」という。）が要求する利益処分案及び決算報告書に対する意見を表明する場合には、監査報告書に次の記載を行うものとする。</p> <p>(1) 監査の対象 利益処分案及び決算報告書</p> <p>(2) 独立行政法人の長の責任 利益処分案及び決算報告書の作成責任は独立行政法人の長にあること</p> <p>(3) 会計監査人の責任 会計監査人の責任は、独立の立場から、利益処分案及び決算報告書について、通則法が要求する意見の表明を行うことにあること</p> <p>(4) 通則法が要求する利益処分案及び決算報告書に対する監査意見</p> <p>(ア) 利益処分案が法令に適合していると認められるかどうか</p> <p>(イ) 決算報告書が独立行政法人の長による予算の区分に従って決算の状況を正しく示していると認められるかどうか</p>	<p>●既出（【監査報告の明確な区分】と同じ）</p> <p>※通則法上「監査人の意見」が必要となっている「利益処分案」及び「決算報告書」について、別区分し、報告基準を規定</p> <p>※規定ぶりは、第6章第5節第3「無限定適正意見の記載事項」を参照（P12）している。</p>

独立行政法人監査基準（現行）	改訂案	改訂案の考え方（案）
<p style="text-align: center;">（新設）</p>	<p><b>第6章 独立行政法人に対する会計監査人の監査の基準</b></p> <p><b>第5節 報告基準</b></p> <p><b>第8 事業報告書に対する報告</b></p> <p>1 会計監査人は、独立行政法人の長の作成した事業報告書について以下の報告を行わなければならない。</p> <p>(1) 事業報告書（会計に関する部分に限る。）が財務諸表の記載と整合しているかどうか</p> <p>(2) 事業報告書（会計に関する部分に限る。）が独立行政法人の財政状態及び運営状況を正しく示しているかどうか</p> <p>2 会計監査人は、事業報告書について報告を行う場合には、監査報告書に次の記載を行うものとする。</p> <p>(1) 監査の対象 事業報告書（会計に関する部分に限る。）</p> <p>(2) 事業報告書に対する報告 事業報告書（会計に関する部分に限る。）が独立行政法人の財政状態及び運営状況を正しく示していると認められるかどうか</p>	<p>●既出（【監査報告の明確な区分】と同じ）</p> <p>※「それ以外の報告書類」として、「事業報告書」を別区分し、報告基準を規定</p> <p>※規定ぶりの一部は、第6章第5節第3「無限定適正意見の記載事項」を参照（P12）している。</p> <p>（注）現行基準では、「事業報告書が独立行政法人の業務運営の状況を正しく示しているかどうか」（P12）といった規定ぶりであるが、「業務運営」といった規定ぶりが曖昧であり、また、事業報告書に対する監査が「(1)事業報告書が財務諸表の記載と整合しているかどうか」として実施されることに鑑みて、財務諸表に対する監査の規定ぶり（P12）にあわせ、「財政状態及び運営状況」との規定ぶりに修正する。</p>